キラメキとソヨカゼ

宮柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キラメキとソヨカゼ

【Ｎコード】
Ｎ６７３７Ｄ

【作者名】
宮柳

【あらすじ】
外世界からの転校生・僕は、新しい学校で、キラメキと出会った。友達になろうと言ったのはキラメキなのに、学校では完全に僕を無視する。帰り道の彼とは別人のようだ。もっと仲良くなりたいと思うが、秘密を持つ僕は、なかなか打ち解けることができない。そんな２人の日常。

［1］出会い

「ウィン！」

背後から呼ばれて、僕は足を止めた。
知らない声で聞くと、自分の名前が自分のものでないように感じる。
僕は、じっと前を向いたまま、振り返るか逃げるか迷った。

・・・逃げよう。

学校からの帰り道に、いい思い出はない。
かばんの紐をぎゅっと掴んで、僕は走り出そうとした。

「ウィーン！」

ふたたび、名前を呼ばれた。
逃げると決めたはずなのに、僕は、つい振り返ってしまった。
さっきより近くで聞いた彼の声は、
微塵の悪意も感じさせないほど朗らかで、
前に通っていた学校のクラスメイトの声とは、まったく違っていた。

彼は少し走ったらしく、軽く息を弾ませていた。
「歩くの早いんだね。門を出たらいないから、探しちゃったよ。」

どうやら、同じクラスの生徒らしい。
今日のホームルームで全員の自己紹介があったが、
僕は、まったく覚えていなかった。

僕が黙り込んだままなので、彼はあっと気づいたように、

「そうか、まだ覚えてないよね。」と言って笑った。

「ボクは、キラメキ。同じクラスだよ。」

手を差し出されて、僕は戸惑った。
すると、キラメキは無理やり僕の右手を掴んで、
ぶんぶんと上下に振った。
「握手だよ。友達になろう。」

・・・友達？
僕は、少し、混乱していた。

キラメキの後ろから射す夕日が眩しかったが、
僕は目を細めて、キラメキの顔を見た。

軽くウェーブのかかった髪が、光に透けて金色に見える。
目は、明るい蜂蜜色だ。
向かい合っていると、ちょうど目線が合うので、
彼の背は、僕とほとんど同じくらいのようだ。

僕を見つめる彼の瞳は、活き活きと輝いている。
転校生の僕に、好奇心があるようだ。
それとも、僕が前に住んでいた場所に興味を持っているのだろうか。
どちらにしても、キラメキの表情はあくまで明るく、
僕の猜疑心は、さらさらと消えてなくなってしまうほどだった。

「うん。友達になろう。」

僕の返事を聞いたキラメキは、すごくうれしそうな顔で笑った。
だから僕も、少し、笑った。

だけど、きっと、ぎこちなかったに違いない。
笑うのなんて、久しぶりだったから。

キラメキは、繋いだままだった右手を勢いよく振って、
いっしょに帰ろう、と言った。
迷うことなく、僕は頷いた。

こうして僕らは、友達になったのだった。

［2］秘密

転校して2日目の朝。

目覚ましのなる前に、僕は目覚めた。
時計を見ると、母さんが起きる時間よりも早かった。
ベッドに横たわったまま、ぼんやりと完全な朝を待つ。

もうすぐ6月になるというのに、まだ少し肌寒い。
だけど、冷たい空気は、好きだ。
美しく澄んでいるような気がするから。

大きく息を吸い、新しい空気を肺に行き渡らせる。

咳もくしゃみも出ない。
気のせいじゃなく、この町の空気は本当に澄んでいるのだ。
そのために、ここへ越してきたのだから。

僕は改めて、母さんに感謝した。
僕のために、生まれ故郷を出る決心をしてくれたのだ。
仕事を辞め、信念も曲げてくれた。

キッチンから物音が聞こえてきた。
母さんが起きたようだ。
鼻歌を歌いながら、朝食を作っている。

僕はベッドを出て、着替えた。

「おはよう。」

「おはよう。よく眠れた？」

「うん、息がしやすいよ。」

「よかった。」

母さんは、ほっとした顔で笑った。
僕はいつも、母さんを心配させてばかりだから、
母さんの笑顔を見るのは、とてもうれしかった。

「友達もできたんだ。」

友達という言葉を使うのは、照れくさかったけど、
僕は、キラメキのことを母さんに話した。
母さんを喜ばせたかったから。
僕がクラスメイトの話をするのは、たぶん初めてのことだ。

「そうなの！よかったじゃない。」

母さんは踊るようなしぐさで、
ハムエッグとトーストをテーブルに並べた。

「でも、」

母さんの口調が、真剣味を帯びたので、
何を言おうとしているのか、すぐに分かった。

「わかってるわよね？あのことは、」

「絶対に言わないよ。大丈夫。」

「・・・気をつけてね。」

心配そうに言ったあと、母さんはすぐに笑顔になった。

「さあ、学校まで歩かなきゃ行けないんだから、
朝ごはん、早く食べちゃいなさいね。」

僕はトーストをくわえたまま、黙って頷いた。

母さんは心配しすぎだと思った。
秘密なんて、たいしたことじゃない。
僕が言わなければ、誰にも知られないのだから。

クラスメイトにいじめられないこと。

僕にとって重要なのは、それだけだった。

［3］外世界

門から教室までの距離を、異常に長く感じた。
廊下ですれちがう別のクラスの生徒たちは、
僕を見て、ひそひそと噂話をしているようだ。
悪口に敏感な僕は、それだけで緊張してしまう。

いったい、どういうふうに言われているのだろう。

「ガイセカイからの転校生」という言葉が何回か聞こえた。
ガイセカイというのが何なのかは知らないけど、
転校生は僕しかいないから、僕のことを言っているのだろう。
どういう意味にしろ、あまり良いようには思えない。
僕は、気分が暗くなるのを感じた。
たとえ秘密がばれなくても、うまくやっていけない気がした。

うつむいたまま歩いていたせいで、
あやうく、自分の教室を通り過ぎてしまうところだった。
転校二日目の僕にとって、教室に入るのは、勇気の要る行為だ。
恐る恐る、ゆっくりとドアを開けると、
クラスメイトが全員、僕のほうを向いていた。

じっと僕を見つめる、顔、顔、顔・・・。
僕は緊張のあまり、しばらく動けないほどだった。

「お、・・・おはよう。」

やっとの思いで、僕が挨拶すると、驚いたことに、

みんなが声を合わせて、おはようと返事してくれた。
しかも、笑顔で。
僕の背筋の硬直は溶けた。
自分の席に歩いていきながら、何度か深く息を吸う。
クラスメイトの顔を、順番に見ながら、
気分が明るくなっていく。
みんなと、仲良くなれるかもしれない、と思った。

「ねえ、君って、ガイセカイから越してきたんだって？」
隣の席の男の子が、僕の机に身体を乗り出して言った。
ほかのクラスメイトたちも、興味深そうに、こちらを見ている。

「ガイセカイって、壁の向こうのこと？」
念のために確認すると、彼は大きく頷いた。

「そう、向こう側のこと。」
この大地は、高く分厚い壁によって、左右に隔てられている。
僕が住んでいたのは、大地の左側。
壁の、向こう側だ。

「それなら、そうだ。僕はガイセカイに住んでたよ。
でも、なんで向こう側のことを、ガイセカイっていうの？」
彼は、あきれたように笑って、
「この世界の外だから、外世界というのさ。向こうでは言わないの？」

「・・・世界の外。」

なんとなく、疎外感を感じさせる言葉だ。

向こうに住んでいたときは、こちら側のことを、
電車も通っていない「田舎」とか、ネット回線もない「古代」とか、
馬鹿にした呼び方をしていたから、似たようなものだ。
むしろ、「外世界」という言葉のほうが、悪意がないぶんマシかもしれない。

「珍しいよな。こっちから向こうに行く連中は結構多いけど、
向こうからこっちに来るのは、ここらじゃ、君が初めてだ。」

僕はどう反応したらいいのか分からなかったので、
中途半端な表情でごまかした。

「ウィンだったよね。俺は、セント。
外世界より、こっちの方が、いいところだよ。
仲良くやろうぜ。」

彼が、「外世界」の人を敵視してないと感じて、
僕は、ちょっと安心した。

壁ができたのは、数世紀も前のことだ。
自然を大切にするか、発展を優先させるか、
政策方針の違いでケンカした人々は、
壁を作って大地を二つに分け、別々の道を歩むことにした。

今でこそ、左右の大地を行き来するのは、難しいことではないし、

実際、僕のように引越しをする人もいる。

けれども、人々の価値観の違いは相変わらず大きい。
無意識の中に、反対側の人を嫌う気持ちがある。

少なくとも「外世界」の人は、こちら側の人を蔑視している。
こちら側は、向こうと比べると、科学・医学など、あらゆる技術が低い。
しかも、進歩できないのではなく、進歩を拒否しているのだ。

中世さながらの生活を望むこちら側の世界。

僕も母さんも、こちら側の世界を低レベルだと感じている。
なんで、学校までの道を、４０分もかけて歩く必要があるだろう。
自動車がありさえすれば、ほんの５分だ。
壁の向こうに行けば、大小さまざまな車が走っているのに、
こちら側には、電車もバスもない。
とても、不便だ。

でも僕は、この不便を受け入れることができる。
自動車や工場のせいで空気の汚れた向こう側で、僕は暮らせない。
レベルの低い生活を強いられるけど、こちら側のほうが空気はきれいだ。
呼吸に苦しむ日々には、二度と、戻りたくない。

母さんは、僕のために、こちら側に住む決意をしてくれた。
さんざん馬鹿にしてきた世界に住むなんて、本当は嫌だろう。
だけど、きっと一生、こちら側で暮らすことになる。

僕たちが、向こうの世界に戻ることは、ないのだ。

［4］横顔

カラーン、コローンと鐘の音が鳴り響いた。
授業開始の合図だ。

がらりとドアが開き、男の先生が入ってきた。

このクラス担任、ヨソラ先生だ。
３０歳くらいだろうか。
この学校の中では、一番若い先生だと思う。
背が高くて、真っ黒な髪の毛をちょっと長めに伸ばしている。

先生は僕の顔を見て、笑顔で頷いた。
なぜだかよく分からないけど、
僕がクラスに馴染んでいると思って、安心した様子だ。
きっと、転校生の僕を心配しているのだろう。
僕は、先生に笑顔を返そうと思ったけれど、
頬がガチガチに硬くなって、あまり上手くいかなかった。

先生が出席をとっている間、僕はキラメキを探した。
教室に入ってきたときは、彼を見つけることができなかったのだ。

キラメキは、窓際の一番後ろの席に座っていた。
僕の席は真ん中の列の、後ろから3番目だから、
キラメキを見ようとすると、かなり不自然な格好になってしまう。
それでも僕は、しばらく彼を見ていた。

窓を細く開けているので、ふわふわの髪の毛が、
風に吹かれて揺れていた。

頬杖をついたまま、ぼんやり外を眺めている。
僕の視線に気付くことは、なさそうだった。
僕は、残念な気持ちで、前を向いた。
ところどころ表面の剥げ落ちた黒板には、
前の学校で、とっくの昔に習ったことが書き連ねてあった。
勉強は、しばらく楽ができそうだ。

＊

昨日は誰一人として僕に話しかけてこなかったのに、
この日の休み時間は、クラスメイトの質問攻めにあった。
そのほとんどは、僕個人のことではなく「外世界」のことだ。
ひとつひとつ答えていくのは大変だったけど、
話すたびに、みんなと仲良くなれる気がしてうれしかった。

でも、僕を囲む輪の中に、キラメキはいなかった。

彼は、窓際にある自分の席にいた。
あの蜂蜜色の瞳は、いつまでも外の景色に向いたままで、
クラスメイトにも、僕のことにも関心がないようだった。

ミナモという女の子が、僕の視線の先を見て、

「キラメキが気になるの？」と言った。

「昨日、ちょっとだけ、しゃべったんだ。」

少々バツの悪い思いで、僕は答えた。

ミナモは、納得した様子で軽く頷いた。

「キラメキはね、すごく良い奴よ。でも、ちょっと変わってんの。」

「そうなの？」

そんなふうには見えなかったけど、と思いながら、
僕は、もう一度、キラメキの横顔に目をやった。
僕がキラメキのことを知りたがっていると判断したのか、
ほかの子たちも、小さな声でキラメキについて話した。

「マイペースなんだよ。いつもあんなふう。」

「でも、外で遊ぶときは、もっと元気だよ。」

「教室では、ぜんぜん、だけどね。」

キラメキのことを悪くいう言葉はなかった。
だけど、彼がどんな人間なのか、さっぱり分からなかった。

僕は、昨日の夕方に見た彼の笑顔を思い出した。
友達になろうといってきたのは、キラメキのほうだ。
それなのに、今日の彼は、一度も僕を見ない。
なんだか、だまされたような気分だった。

友達ができたと思ったのに。

＊

一日の授業が終わった。

同じ方向に住んでいる人はいなかったので、
クラスメイトたちとは、門の前で別れた。

「じゃあね～。」

「また明日。」

大きく手を振ってから、僕は歩き出した。
昨日と同じ帰り道だけど、まったく違う気分だ。
足が軽い。
明日からの毎日が、とても楽しみだ。

だけど・・・

教室で見た、キラメキの横顔を思い出す。
昨日の彼が見せた笑顔とは、うまく重ならない。
まるで、別人のようだった。

すっと明るい気分がしぼんでいくのを感じて、
僕は、足元に目を落とした。

「・・・・！」

名前を呼ばれた気がして、僕は足を止めた。
はっとして、振り返る。
もしかして、という、期待があった。

「ウィン！」

キラメキだった。

キラメキが、昨日と同じに、夕日を背にして立っていた。

［5］夕焼けと月

傾き始めた太陽が、空をオレンジに染める。
その光を受けたキラメキの髪は、昼間とは別の色に見える。
夕焼け空に似た、黄金色。

「ウィン、いっしょに帰ろうよ。」

キラメキが、まっすぐに僕を見て言った。

学校にいる間、ただの一度も、僕を見なかったのに。
それなのに今、僕を追って、ここに来た。
そして、友達のような顔で、一緒に帰ろうと言う。

彼の無関心な態度に、僕がどれだけ落胆したか、
きっと彼は、まったく想像していないにちがいない。

「いいよ、一人で帰るから。」

そう言って僕は、キラメキに背を向け、歩き出した。

言った瞬間から、心がチクチクと痛むのを感じた。
とても意地悪なことを言った気がする。
でも、口にした言葉は、取り戻せない。
僕は罪悪感から逃げるように、早足になった。

「ウィン！」

タ、タ、タ・・・と、軽い足音が聞こえた。

「ウィン。」

すぐ横でキラメキの声がした。
ちらりと右を見ると、明るい表情のキラメキがいた。
わずかな曇りもない笑顔。
僕の言ったことなど、少しも気に留めていない様子だ。
彼を傷つけたと思っていた僕は、ちょっと拍子抜けした。

「なんだよ。」

僕はキラメキを見ないように、前を向いた。
キラメキの人懐っこい表情を見ていると、
彼が学校で見せた冷たい態度を忘れてしまいそうになる。
キラメキを、仲の良い友達だと思ってしまいそうになる。

でもきっと、彼はまた僕に無関心になる。

今日みたいに学校で無視されるなら、僕は一人で帰る。
キラメキは友達じゃない、と思ったほうがいい。

「ねえ、面白いものを見せてあげる。」

「面白いもの？」

僕はまた、キラメキの顔を見てしまった。

こちら側の世界には、テレビもゲームもない。
引越しして数日しか経っていないのに、僕は退屈していた。
面白いものって、何だろう。

「面白いものって、なに？」
彼の返事を、期待して待つ。
「とても、きれいなものだよ。」
彼の両目が、きらきらと輝いている。
夕日の反射だろうか。
まるで、彼の瞳そのものが光を宿しているようだ。
僕が興味を示したので、いっしょに行くと判断したらしい。
キラメキは、ぐいぐいと僕の手を引っ張って走り出した。
「早くしないと、間に合わない。」
「え。」
まだ、行くとは言ってない。
そう言おうと思ったが、その余裕はなかった。
キラメキが走るので、僕も走らなくてはならない。
走りなれていない僕は、転ばないようにするので精一杯だった。
必死で、両足を動かし続ける。
「早く、早く！」
キラメキは、僕のもたもたした足取りが、もどかしいようだ。
でも僕は、これ以上速く走れない。
なにしろ、体育の授業は、全部欠席していたくらいなのだ。
走った経験は、ほとんど、ない。

キラメキは、ゆっくり走ってくれているのだろうが、
僕にとっては、全力疾走に近かった。

丘の上まで、ほとんど、一気に駆け上がった。
頂上にある大きな木の下で、ようやくキラメキは手を離してくれた。

足が、がくがくと震えていた。
呼吸も苦しくて、僕は、草の上に座り込んでしまった。

「登って。」

上のほうから、声がした。
何気なく顔を上げると、キラメキは太い木の枝に座っていた。
いつの間に登ったのだろう。
素早い。

「無理だよ。」

木登りなんて、したことない。

「登れるよ。」

あきれたように、キラメキが言う。

「簡単な木だ。」

するすると、キラメキが地面に降りてきた。

「さあ、手伝うから。」

それからしばらく、僕は死に物狂いで頑張った。
キラメキを踏み台にしたり、手を引っ張ってもらったり。
手やひざを切ったことに、気付かないくらいだった。

「間に合った。」

「・・・よかった。」

キラメキに調子を合わせて言ったけれど、
正直、もう、どうでもよかった。
なんのために、走ったり木に登ったりしたのか、わからない。
空中に揺れる自分の足と、地面に生えている草を見比べる。
落ちたら大変だ。
僕は、木の枝にしがみついた。

「ウィン、向こうを見て。」

キラメキの指す方向を見ると、
太陽が地平線の奥に沈もうとしていた。

まっすぐな地平線を見ながら、
この町には、本当に何もないんだなと思った。
民家が、いくつかあるだけだ。
映画館やショッピングセンターのような、大きな建物はひとつもない。
休みの日には、何をしているんだろう。

「それから、あっち。」

今度は、月だ。

薄い水色の空に、白い三日月が浮かんでいる。

夕日と、月。
僕に見えるのは、それだけだ。
面白そうなものは、なにもない。

「順番に、ちゃんと見ててね。」

僕は、わけのわからないまま、太陽と月を見ていた。
言われたとおり、ちゃんと順番に。

日が沈むにつれ、夕焼けのオレンジ色が濃くなり、
月の浮かぶ方角の空は、水色から群青色へと変化する。
群青の空気に浮かぶ月は、少しずつ黄色味を帯びていく。

太陽の残り火がすべて消えてしまうと、
空は闇に近いほどの紫色になる。
月のまわりにぽつぽつと小さな光が灯った。

夜がきたのだ。

面白いことは、何も起きなかった。
ここに来た時点で、期待する気持ちはなくなっていたから、
特に、がっかりすることもなかった。

「ねえ、もう帰らなきゃ。」

僕は空を見るのをやめて、言った。
キラメキは、まだ空を見つめている。
いったい何を見ているのか、僕には分からない。

僕らの上には、何もない夜があるだけだ。

「星座はわかる？」

空を見たまま、キラメキが言った。

「星座？」

僕は、もう一度、空を見上げた。
ぽつぽつと砂金のように散らばる光。
僕が以前住んでいた、向こう側の空にはなかったものだ。

「・・・星？」

教科書で習った言葉を思い出した。
あれが、そうなのか。
思っていたのと、全然違った。
熊とか柄杓とかが、絵のようにわかるものだと思っていた。
プラネタリウムのほうがいいな、と僕は思った。

「ちゃんと、見てた？」

キラメキが僕のほうを向いて、確認するように聞く。

「見ていたよ。」

でも、何も起こらなかった。

「きれいだったろう。」

キラメキは、うれしそうに言う。
僕の不満に、キラメキは気付かなかったようだ。
彼が、僕に何を見せたかったのか、まったく分からない。
だけど、それを聞くことができなくて、僕は口をつぐんだ。

「この場所からだと、よく見えるんだ。
つまり、太陽と月がバトンタッチする姿が、ちゃんとね。」

「そうだね。」

僕は、キラメキが何を言っているのか理解できない。
わからないけど、頷いた。

「もう遅いよ。帰らなきゃ。」

一呼吸おいてから、僕は言った。
なんとなく帰りたいとは言いにくい雰囲気だった。
でも僕は、もう家に帰りたかった。
こんな暗いところにいるのは、嫌だった。
街灯のない、この町の夜は、闇のようなのだ。

「そう、だね。」

キラメキは名残惜しそうに月を見てから、木を降りた。
僕も手伝ってもらいながら、草の地面に戻ってきた。
安定した場所に立っていると、落ち着く。

「じゃあね。」

キラメキは、木の幹に寄りかかったままだった。

まだ、帰らないのだろうか。
歩き出す気配のないキラメキを置いて、
僕は家の方角へと歩き始めた。

「バイバイ。」

キラメキの声が虚ろに聞こえて、僕は振り返った。

「キラメキ？」

彼は、もう、いなかった。
暗闇に目を凝らすと、丘の向こうを駆けていく彼の背中が、
かすかに見えた気がした。

［6］嫌な夢

夢を見た。

教室に入った僕は、キラメキの姿を探した。
窓際の一番後ろの席。
キラメキは、来ていなかった。
僕は、落ち着かない気持ちで、教室のドアを見る。
やがて、鐘の音が鳴り響き、先生が出席をとりはじめる。
それでも、キラメキは来ない。
僕はもう一度、キラメキの席を振り返った。
しかしそこには、彼の机も椅子も、なかった。

はっと驚いて、目が覚めた。

嫌な夢だった。
夢だと分かっても、まだ、落ち着かない。

ベッドに横になったまま、天井を眺める。
薄暗い天井に、木の下に立つキラメキの姿が浮かんだ。
その顔は、少し寂しげだ。
本当は、暗くて彼の表情まで見えなかったはずなのに。

キラメキは、あの暗闇に溶けてしまったのではないか。
それとも、最初から、彼は存在しなかったのだろうか。

いや、そんなはずはない。

僕は、昨日一日のできごとを思い出そうとした。

しかし、掴もうとすればするほど、記憶は逃げていく。
さっき見た夢のほうが、妙に現実味を帯びて思い出された。
＊
不安を消し去ることのできないまま、僕は教室のドアを開けた。
真っ先に、キラメキの席を確認した。
窓際の一番後ろ。
そこには、ぼんやりと外を眺めるキラメキがいた。
昨日と同じ様子だ。
窓を少しだけ開けていることも、
頬杖をついていることも、昨日とまったく変わらない。
ほっとして、笑い出しそうになった。
彼の存在を疑った自分が、馬鹿みたいに思えてくる。
クラスメイトと挨拶を交わしながら、自分の机に向う。
歩きながらも、ちらちらとキラメキの様子を伺ったが、
彼はずっと外を向いたままだった。
まるで、すべてのものを、拒絶するような横顔。
今、僕が声をかけても、完全に無視されるか、
「誰？」などと言われてしまうような気がした。
そんなことを想像するだけで、僕は恐怖を感じる。
僕はそのまま、自分の席に座った。
振り返って、もう一度キラメキを見ると、

彼はやはり、変わらぬ体勢でいる。

きっとキラメキは、今日も一日、こんな様子なのだろう。

学校にいるキラメキと、帰り道でのキラメキは、
まったく別人のように、雰囲気が違う。
窓際に座っている彼には、明るさや活発さがない。

どうしてなのだろう。

彼に尋ねたいと思う。
でも、キラメキと話すには、帰り道を待つしかなさそうだ。

学校が終わるのが、待ち遠しかった。

［7］謎じゃない謎

キラメキが、いつも何を見ているのか。
なぜ、誰とも話そうとしないのか。
僕にとっては、大きな謎だった。

キラメキに直接聞くしかない。
キラメキとの対話を求め、僕は放課後を待っていた。

今の僕には、彼に近づく勇気がない。

窓際に座ったまま、じっと外を見ている彼は、
僕だけでなくクラスメイト全員を無視している。
でも、学校の帰り道では、僕に話しかけてくれる。

放課後を待つしかないと思っていた。

ところが、思っていたよりも早く、謎のひとつが解けた。
僕は、キラメキが何を見ていたのかを知ったのだ。

＊

「キラメキ！ベースボールしようぜ。」

昼休みのことだった。
セントの声に驚き、僕は後ろを向いた。
セントは、キラメキの肩を掴んで、揺さぶっている。

「いつまでそうしてるんだよ。」

僕が転校してきた日から、今日までの3日間で、
誰かがキラメキに話しかけているのを、初めて見た。

「セント、早く行こう！」

カイが、教室のドアの前から、大声で言った。

「キラメキも連れていくから、先に出てろよ。」

「ウィンも、外で遊ぼうよ。」

カイに誘われて、僕は立ち上がった。

キラメキが、どうするのか気になってしかたない。
だけど、振り返ることはできなかった。
耳だけを後方に集中させて、のろのろとイスを机の下に押し込む。

「ウィン？」

カイはもうドアの外に出ようとしている。

「行くよ、待って。」

僕は急いで、カイのもとに向かった。

「壁なんか見てても、仕方ないだろ。」

セントの声が、耳に残った。

壁。

キラメキは、壁を、見ている？

「壁って・・・」

カイに聞こうとして、やめた。

「なに？」

僕の声に、カイが振り返った。

クラスで一番背の低いカイは、機敏な動きと、
くるくるとよく動く目が印象的だ。
彼の茶色い瞳は、いつも愉快そうな笑みを浮かべている。

「ウィン、なんか言っただろ？なんだよ。」

カイは笑いながら、僕の肩を小突く。

「なんでもないよ。」

僕は笑ってごまかそうとした。

「言いかけたことは、最後まで言えよ。」

カイはなおも僕の肩を突付く。
僕が言ったことを知りたいのではなく、
単に僕を困らせるのを楽しんでいるようにみえる。

「どうしたのさ？」

一瞬、僕は、自分の耳を疑った。
しかし振り向いた僕の前には、やはりキラメキがいた。
キラメキは、ズボンのポケットに手を入れて、
僕とカイの様子を不思議そうに見つめている。

「遊びに行かないの？」

明るい表情で尋ねるキラメキは、
さっきまでぼんやりとしていた彼とは別人のようだ。

「ウィンが言わないからさ。」

「なにを？」

「壁のことかもしれない。」

カイがキラメキと話すのを、僕は黙って見ていた。
驚きすぎて、口がきけなかったのだ。

「早く行こう。休み時間が終わる。」

セントの声に、カイとキラメキは走り出した。
僕も遅れて、走り出した。

・・・当たり前じゃないか。

僕は、無理やり、笑おうとした。

毎日毎日、じっと窓際に座っているわけがない。
何年も学校に通っていて、彼に友達がいないわけがない。

帰り道のキラメキを知っているのに、僕は、
キラメキはずっと、窓際に座っているような気がしていた。
キラメキには、僕以外に友達がいないように思っていた。

そんなことがあるわけないのに、僕は本当に、馬鹿だ。

僕は、キラメキのことを何にも知らないのだ。
僕が謎に思っていることなんて、実際は謎でも何でもないのだ。
疑問に思っているのは僕だけなのだ。

そのことを僕は、哀しいと思った。

キラメキが壁を見ていることはわかった。
でも、それが何故なのかはわからない。
きっと、ほかのみんなは知っているのだろう。

僕も、それを知りたい。
キラメキと、本当の友達になりたいと、思った。

［8］ひとり

昼休みの校庭は、にぎやかだ。

ボールゲームをしているグループもあれば、
ゴム跳びをしているグループもある。
みんな楽しそうに、大声で叫んだり笑ったりしている。
僕は木陰に座って、みんなを見ていた。
僕のクラスの男子は、ベースボールをしている。

「打たせるなよ〜！」セントの大声に、

「絶対、打つ！」とカイが応じる。

カイは、ぶんぶんと軽くバットを振ってみせた。
そして言葉の通り、のっぽのトーチが投げたボールを、
カーンという音とともに高く打ち上げた。

「トーチィー！」

セントの怒鳴り声と、みんなの笑い声。
そのなかに、キラメキもいる。
グローブをつけた手を振り、何かを言って笑っている。

僕はため息をついて、校舎の大時計を見た。
昼休みなんて、なければいいと思う。
みんな外で遊ぶから、つまらない。

前の学校でも、僕はいつもひとりだった。
病気のせいで運動を禁止されていたし、
入退院を繰り返していたせいで、仲の良い友達がいなかった。

今は、運動しても大丈夫な身体になったし、
外で遊ぼうと誘ってくれる友達もいる。
だけど僕は、ベースボールをしたことがない。
教えてほしいと言う勇気も、ない。
新しい学校でも、やっぱり僕は、ひとりなのだ。

カラーン、コローン・・・

ようやく、昼休みの終了を告げる鐘が鳴った。
校庭で遊んでいた生徒たちは、慌てて道具を片付けている。
僕は立ち上がり、ズボンについた草を払った。
ひとり、校舎に向かって歩き出す。

「ウィン。」

駆け足で僕を追ってきたのは、キラメキだった。

「なに。」

どういうわけか、そっけない声になってしまう。
僕はキラメキの顔をちょっと見ただけで、そのまま歩き続けた。

「なんでベースボールしなかったの。」

キラメキは僕の右側に並んで歩き出した。

「なんでって・・・。」

ベースボールをしたことがないとは、言いたくなかった。
僕はキラメキの視線から逃げて、顔を左に向けた。

「嫌いなの？」

「別に。」

キラメキは、僕の顔を覗き込もうとするので、
僕はさらに顔をそらして、ほとんど真横を向いて歩いていた。
どうも彼は、人の目を見て話さないと気がすまないようだ。

「じゃあ、明日はいっしょに遊ぼうよ。」

ついにキラメキは、僕の前に立って、後ろ向きに歩きはじめた。
彼を無視するのを諦めて、僕は立ち止まった。

「したことないんだ。」

「え。」

キラメキも、立ち止まった。

僕は、ベースボールを一度もしたことがないことや、
身体が弱くて、外では遊べなかったことを説明した。

キラメキは、とまどった表情をしている。
病気のことを言うと、みんなこんな顔をするのだ。

「もう、大丈夫なんだけどね。」
安心させるつもりで口にした言葉に、彼は眉をひそめた。
「どういうこと？」
キラメキの声に、僕は、はっとした。
言ってはいけないことを、言いかけてしまった。
どうして、今の僕は健康なのか。
その理由は、こちら側の世界では、絶対の秘密なのに。
「もしかして・・・。」
動揺した顔のキラメキが、恐々と口を開く。
「空気のせいだったから！」
キラメキの口を塞ぐように、僕は大きな声を出した。
「こっちの空気はきれいだから、大丈夫なんだ。」
キラメキは、何かを確かめるような目で僕を見た。
いくら見つめても、僕の秘密は見つけられない。
わかっていても、僕は緊張した。
のどが、からからに渇いている。
「どうした？授業、始まるぞ～。」

向かい合い、立ち止まっている僕たちの横を、
セントたちが駆けていった。

「行こう。」キラメキが僕に言った。

黙ったまま僕は、走り出したキラメキの後を追った。
うつむき、みんなの足を見ながら走る。
キラメキに、今の僕の表情を見られたくなかった。
きっと、緊張して、焦った顔をしている。

あやうく、自分の秘密をばらすところだった。
キラメキは、気付いてしまったのだろうか。
はたして僕は、うまくごまかせたのだろうか。

「ウィン。」

キラメキの声に、僕は顔を上げた。
いつのまにか彼は、僕の横を走っていた。
キラメキの顔には、先ほどの動揺はない。
何もなかったみたいに、穏やかな笑顔を浮かべている。

「ベースボール、教えるよ。」

僕がぼんやりしていると、キラメキは繰り返した。

「ベースボール、教えるよ。
明日の昼休みは、いっしょにやろう。」

一瞬、ボールを投げている自分を想像した。
昼休み、みんなと遊んでいる自分を、想像した。

もう、ひとりで過ごさなくていいんだ。

「うん。」

僕は大きく頷いた。
キラメキは、嬉しそうに笑った。
僕も笑った。

秘密がばれたかどうかなんていう不安は、
意識の外に消えてしまった。

もう、ひとりじゃない。

［9］キャッチボール

学校が終わると、僕とキラメキは丘に向かった。
草の上に座って、キラメキはベースボールのルールを説明してくれた。
僕もゲームを観戦したことはあるので、割と簡単に理解できた。
ルールが分かったら、まずはキャッチボールの練習だねと、キラメキが言う。
「じゃあ、明日の昼休みに？」と僕は言った。
ここには、ベースボールの道具はないからだ。
「今から、ここで、練習しようよ。」とキラメキ。
「まだ明るいし、ここなら練習できるよ。」
「でも、ボールも何もないよ。」
「だいじょうぶ。」
意味が分からずに僕が黙ると、彼はカバンの中からボールを取り出した。
続けて、グローブが2個、出てきた。
なんとキラメキは、学校の備品を勝手に持ち出していたのだ。
「いけないんじゃないの？」

僕は不安になって言ったが、キラメキは全く平気な様子だ。

「明日の朝返しておけば、誰にもわからないよ。」

僕は、先生に怒られるんじゃないかと不安だったけれど、キラメキに渡されたグローブを手にはめた。悪いことをしている気がして、落ち着かない。

「心配するなって。」

キラメキは、僕の様子をみておかしそうに笑っている。きっと、僕は心配しすぎなのだろう。

「さ、始めようか。」

すぐ近くからボールを投げられ、僕はつい素手でボールを取ってしまった。

「グローブで受け取らなきゃ！」

キラメキが笑う。

「わかってるけど！」

自分の手のひらが少し赤くなっているのを見て、僕も笑ってしまった。

「投げるよ！」

僕が投げたボールは、右のほうに飛んでいったけれど、

キラメキは走って、それを受け止めた。
こんな風に、僕たちのキャッチボールは始まった。
＊
「初めてにしては上出来だよ！」
しばらくキャッチボールを続けたあと、
キラメキが大人みたいな口調でそう言った。
「本当に？」
僕は、嬉しいのを声に出さないよう、注意しながら言った。
「本当だよ！」
キラメキはそう言ってくれたけど、
僕は、自分のキャッチボールが下手なことはわかっていた。
僕の投げるボールには、高さも距離もない。
おまけに、コントロールも悪かった。
それでもキャッチボールが続いているのは、
キラメキが前後左右と機敏に動いてくれているおかげだ。
慣れない運動をしたせいで、だんだん肩が痛くなってきたけれど、
ボールを投げたり、受け止めたりすることは、面白かった。
あたりが薄暗くなってきて、ボールが見にくくなった頃、
キラメキが、西の空を見て叫んだ。

「もうすぐ、日が沈む！」

キラメキは、ボールとグローブをかばんの上に投げつけると、
丘の上にある一番大きな木の下に駆け寄った。
それを見た僕もなぜだか慌てて、グローブを投げ捨てた。

「早く！」

僕は昨日と同じように、キラメキに助けてもらいながら木に登った。
僕は、慌てて木に登る自分が不思議だった。

キラメキが急いでいる理由は、わかっている。
彼の言う「夕日と月のバトンタッチ」を見るためだ。
彼にとっては、この上なく、面白いもの。

だけど、僕が慌てる理由はない。
僕は、日没の瞬間に興味はないし、
昨日の退屈な時間を繰り返すつもりもなかった。

それなのに、さっき、僕は早く木に登らなきゃと思った。
どういうわけか、キラメキが見たいのなら、
一緒に日没を眺めるのも悪くないような気がしたのだ。
僕にとっては、どうでもいい景色だけれど、それでも。

＊

僕たちは、西の方角を向いて、木の幹に座った。
僕は足でしっかりと幹を挟んでいるけど、

キラメキは幹に腰掛けているだけで、両足はぶらぶらと揺らしている。
僕は彼が木から落ちるんじゃないかと、余計な心配をしてしまう。
キラメキは、目を輝かせて空を見ている。
「ねぇ、毎日こうして、夕日を見ているの？」
気になっていることを聞いてみる。
しかし彼は、返事をするどころか振り向きもしなかった。
僕は、そっと溜め息をついた。
きっと、日が沈みきるまでは、こんな調子なのだろう。
どうして彼は、いつまでも見つづけるのだろう？
太陽と月のほかに、何もない空を。
どうして、面白いなどと思えるのだろう。
キラメキの横顔を見ながら、僕は静かに日没を待った。

［10］夜空

木の上で、僕たちは無言だった。

キラメキは空を見たまま、ひとこともしゃべらない。
空に見とれているのだ。
こんなときに僕が話しかけても、キラメキは返事をしない。
きっと聞こえてないのだろう。

しかたなく、僕も空を見た。
夕日で空が赤く染まる。
地平線の付近は、特に深い色をしている。
遠くの森から、鳥の鳴く声が聞こえた。
静かだった。

やがて日が沈み、木々が色を失っていく。
キラメキは、まだ、空を見ている。

空に飽きた僕は、キラメキの横顔を見た。
まるで彼ひとり、映画館にいるようだ、と思った。
暗い館内でスクリーンを見ているような顔つきをしている。
嬉しそうに夜空を眺める彼が、なぜか羨ましい。
いったい、この空の何が彼を惹きつけるのだろう。
僕には、わからない。

僕は、空がすっかり暗くなるのを待った。
小さな星が、ぽつぽつと暗闇に浮かんでいる。

「帰ろうか。」

「・・・そうだね。」

頷きつつも、キラメキは名残惜しそうに空を見上げたままだ。
毎日のように木の上から日没を眺めているはずなのに、
それでも、この場所を離れがたく感じるらしい。

僕は、先に木から降りることにした。
木の枝から幹に移動するのは上手くいったけれど、
次の一歩で、僕は足を滑らせてしまった。
幹を抱きかかえるような格好で、僕はずるずると降下した。
手のひらが、じんじんと痛む。

「だいじょうぶ？」

慌てたようすで、キラメキも木から降りてきた。
驚くほど滑らかな動きだ。
まるで、僕には見えない階段が存在しているようだ。

「だいじょうぶだよ。」

僕はそう答えた。
なんとなく、両手を隠す。

「そっか。よかった。」

キラメキが、ほっと息をつくのが聞こえた。

「あ、グローブとボール、忘れないようにしなきゃ。」

ふと思い出して、僕は言った。

「ああ、そうだ。」

キラメキは、気の抜けたような声で言って、笑った。
無断で持ち出した備品のことなんか、すっかり忘れていたのだろう。

「さっき、カバンの上に置いてきたよね。」

僕らは、丘を少しくだって、キャッチボールをした場所に戻った。
日が沈んで、あたりはすっかり暗くなっていたので、
カバンはなかなか見つからなかった。

「あ、カバン！」

僕がカバンを見つけた。
キラメキのカバンも、すぐに見つかった。
それぞれのカバンの上に、グローブもあった。
だけど、ボールは見当たらない。
そのへんに転がっていってしまったのだろう。

「ボール、どこいったかなぁ。」

キラメキは暢気に呟きながら、カバンの周囲を探している。
僕も、草むらに目を凝らした。
ボールが見つからなかったら、僕らは明日、ひどく叱られるだろう。
キラメキがどうして暢気でいられるのか、僕は不思議だった。

「あ、あった！あったよ。」

キラメキが嬉しそうな声をあげた。

「よかった！」

「明日の朝、ちゃんと戻しておくから。」

そう言って、キラメキはグローブとボールをカバンに入れた。

「ありがとう。じゃあ・・・」

僕が言い終わる前に、キラメキは走って行ってしまった。
僕は、キラメキの背中に向かって、大声で叫んだ。

「バイバーイ！」

キラメキは走りながら、振り返って、僕を見た。

「じゃあな～！ウィーン！」

キラメキの返事を聞いて、僕はもう一度だけ手を振った。
それから、家に向かって歩き出した。
明日も、夕日を見るのかな、と思いながら。

＊

僕の帰りが遅いことを、母さんは喜んでいるようだった。

「お友達と遊んでいたの？」

テーブルに料理を並べながら、母さんが僕を見た。

「うん、キラメキと。キャッチボールを教えてもらったんだ。」
なんだか、すごく、自慢したい気分だった。
僕は、今日の昼休みのことから全部、母さんに話した。
最初、手のひらでボールを捕ろうとしてしまったことも、
キラメキに、ボールの投げ方を褒められたことも。
母さんは夕食の準備をしながら、僕の話を聞いていた。
ずっと、にこにこと笑っていた。

「本当によかったわ。」

僕が話し終わると、母さんは言った。
本当に嬉しそうな顔をしていた。
僕も嬉しかった。

「母さんの言うとおり、手術してよかった。」

僕は、心からそう思った。
手術を怖がった僕を説得したのは母さんだった。

「ウィン・・・。」

母さんが、困ったような、悲しいような表情になった。
それから、ゆっくり右手の人差し指を口元に立てた。
言ってはいけないという合図だ。

「わかってるよ、母さん。外では言わない。」

「家でも言ってはダメ。

ばれたら大変なの、わかっているでしょ？」
僕は、父さんから聞いた話を思い出した。
その話を聞いたとき、僕は怖くて泣いたほどだ。
右の世界になんか、引っ越したくないと思った。

「うん・・・わかってるよ。でも・・・。」

でも、今は、引っ越しをして良かったと思う。
不便なことはたくさんあるけれど、空気がきれいで呼吸しやすいし、
それになにより、友達ができた。
近所の人も、いい人たちばかりだ。
父さんに聞いたような、酷いことをするわけがないと思う。

「お願いよ、ウィン、約束して。」

母さんの目は、真剣だった。
僕のことを心配しているのだ。

「約束するよ。絶対言わない。家のなかでも。」

僕は、母さんの目を見て、約束した。
手術をしたことは、絶対に秘密なのだ。
引越しをする前にも約束したのに、僕は破ってしまった。
次に約束を破ったら、僕は左の世界に戻らなくてはいけないだろう。
母さんが心配して、僕がどんなに嫌がっても引っ越すに違いない。
殺されるよりは、空気の悪い町に住むほうがましだから、と。
僕は、カーテンの隙間から夜空を見た。

左の世界には、星などなかった。
空の好きなキラメキでも、向うの空に見とれることはないだろう。

絶対、言わない。

心のなかで、僕は自分と約束した。
僕は、右の世界で生きていきたいのだ。

［11］父さんの話

右の世界に来て、夜の長さを知った。
日が暮れると、すぐに夜が来る。
月と星以外、空を照らすものは何もない。
家の中では、ランプを使う。
電灯とは違い、夜に勝てない弱々しい灯りだ。
しかも、町で売られるオイルの量には限りがあるらしく、
できるだけ節約して使わなければならないという。
だから、夕食を終え、僕が宿題を済ませると、ランプは消されてしまう。
そのあとは、必要に応じて蝋燭を使う。
蝋燭の灯りは、さらに弱々しい。

ゲームがあれば、退屈な夜を過ごさなくて済むのに、
ここにはゲーム機もパソコンもない。
右の世界に電子機器等を持ち込むことは禁止されているから、
それらは全て、前の家に置いたままになっている。
ベッドに行く時間が、何時間も早くなった。

日が沈み、日が昇るまで、すべてが夜だ。
夜が、長い。

今夜も僕は、かなり早い時間にベッドに向かった。
横たわって、天井を見る。
蝋燭を消した室内は、完全な闇だ。

今日、僕はキャッチボールと木登りをした。

慣れないことをして、相当疲れているはずだ。
しかし、僕の目は冴えている。
なかなか寝付けそうにない。
さっき、手術のことを口にしてしまったせいで、
引っ越す前に抱いていた不安が蘇ったようだった。

耳元で、父さんの低い笑い声が聞こえた。
くっくっ・・・と、喉の奥から出る笑い。

「気をつけろよ。」

そう言う父さんの顔は、少し、笑っていた。
右の頬をひきつらせた父さんの顔。
それが彼の笑顔なのだと気付いたのは、つい最近のことだ。
笑い声と同じように、父さんの笑顔は僕に恐怖を抱かせた。

母さんの朗らかな笑い声とは、まったく異なる父さんの笑い声。
母さんの明るい笑顔とは、まったく異なる父さんの笑顔。
一緒に過ごした時間の長さが違うせいなのだろうか。
僕は、父さんに親しみを感じることができなかった。

医者をしている父さんは、めったに家に帰ってこない。
たまに家にいても、僕と会話をすることはなかった。
学校の成績のことも、体調のことも、訊かれたことがない。
きっと、父さんは、僕に興味がなかったのだろう。

それでも、僕と母さんが右への移住を決めたとき、
父さんはわざわざ僕の部屋に入ってきて、話をしてくれた。
そんなことは、それまで一度もなかった。
僕は、父さんが重要なことを言いに来たのだと思い、

ひとことも聞き逃すまいと必死だった。

だから僕は、覚えている。
話の内容だけではない。
僕の反応を確認するような間のとり方も、ときおりもらす笑い声も、
窓辺に立っていたせいで、少し逆光になっていた父さんの表情も、
すべて。
こちらに引っ越してくるまでの数週間、毎晩その光景を反芻していた。
右の世界に行くことへの不安は膨らみ続け、ほとんど眠れなくなった。
僕は母さんに、泣きながら、引っ越したくないと訴えたものだった。

「気をつけろよ。」

父さんの、低い笑い声が耳元に響く。
暗い天井に、あのときの父さんの顔が浮かんで見えた。
片頬を歪めた表情。
つまり、父さんにとっての笑顔。

「お前の母さんが行くと決めたのなら、俺は止めない。
だが、警告はしておく。
向うの世界は、お前にとって安全ではない。
そりゃ、空気はいいだろう。
工業っていうもんが、まるでないんだからな。
自動車どころか、電気すらないんだ。
空気の悪くなりようがないってことさ。

だが、忘れるな。
向こうは、科学が未発達な世界ではなく、科学を拒絶した世界だ。

この違いが、お前はわかるか？

聞いたことくらいあるだろう、カルメ事件のことは。

工場で遊んでいた7歳の女の子が、機械に腕を巻き込まれた。
左腕の半分を失った彼女は、この病院で義手をつける手術をした。
腕を失ったことは悲劇だったが、手術は成功した。
成長に従い、再手術は必要になるが、生活に支障が出ることはない。

本当の悲劇は、彼女の母親が右からの移住者だったことだ。

夏休み、カルメは祖父母の家に行くのが習慣だった。
つまり、壁の向こう側にな。
手術をした年の夏休み、カルメは殺された。
遊びに行ったバアサンの町で、集団リンチにあったんだ。
カルメはロボットだとか、神に背いたとかってのが理由なんだと。

お前も同じだ。
向こうでは、許されない存在。
心臓のことがばれたら、殺されるかもしれない。

気をつけろよ。

正体がばれないように・・・。」

父さんは、最後に再び、あの笑みを浮かべたのだった。

＊

暗闇に目が慣れてきたのか、ぼんやりと窓のあたりが明るくみえた。

今では、わかる。
あのとき、父さんは、僕を心配していたのではない。
僕が怖がるのを面白がっていたのかもしれないし、
僕が殺されるかもしれない状況を面白がっていたのかもしれない。
でも、そんなことは、どうでもいい。
父さんの話が事実なのは確かだから。

ただ、あの少女とは違って、
僕の正体は、簡単にはばれないだろうと思う。
僕が手術したのは、心臓。
服の上から、心臓に手を置く。
手のひらに、規則的な鼓動を感じる。

大丈夫。
絶対、誰にも、わからない。
この中身が、本物か機械か、外からは見えない。
だから、大丈夫・・・。

不意に眠気を感じ、僕は、やっと目を閉じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6737d/

キラメキとソヨカゼ

2010年10月10日13時10分発行